

# 山城地域における弥生時代中期の編年

藤井 整

## 1. はじめに

近畿地方の土器編年の細分とその併行関係の整理をめざした『弥生土器の様式と編年』(以下『様式と編年』)<sup>(注1)</sup>が世に問われてから10年が経ようとしている。その間、山城では多くの弥生遺跡が調査され、特に弥生時代中期の資料増加はめざましいものがある。小論では新資料の位置づけを中心に、山城地域の編年について私案をまとめたと思う。

山城地域は、長岡京市雲宮遺跡(以下新出のもの以外は「遺跡」を省略する)における前期三段階区分が提示されるなど、古くから注目される地域であったにもかかわらず、その資料的制約から編年観の整理が遅れた地域であった。國下多美樹氏は向日市鶏冠井遺跡における編年案を示し、この遺跡で出土した銅鐸鑄型の帰属時期と、土器の変遷を明らかにした。<sup>(注2)</sup>1つの遺跡に対象をしぼることで、遺跡内における動態や、土器の生産・供給といった問題へも言及することができたが、その反面微細な土器片をも含めた編年とならざるをえず、山城地域全体への普遍化や、他遺跡との対比には難があった。

森岡秀人氏は『様式と編年』の中で、包含層資料までを整理した編年観を示し、山城地域では初の体系的な編年案となったが、この段階では未だ良好な資料に恵まれておらず、型式学的な操作を経たものが中心となっていた。この編年では従来の畿内第Ⅱ様式に加え、畿内第Ⅲ様式への過渡的な部分をも山城第Ⅱ様式と評価したため、周辺地域の編年に比べやや突出したものとなった。この新しい編年観は、次の國下編年にも受け継がれることとなり、<sup>(注3)</sup>こうした編年観によって、近江地域との編年のズレが生じ、特に近江から搬入されたと考えられる特徴的な土器群をめぐって若干の混乱をまねく結果となっている。

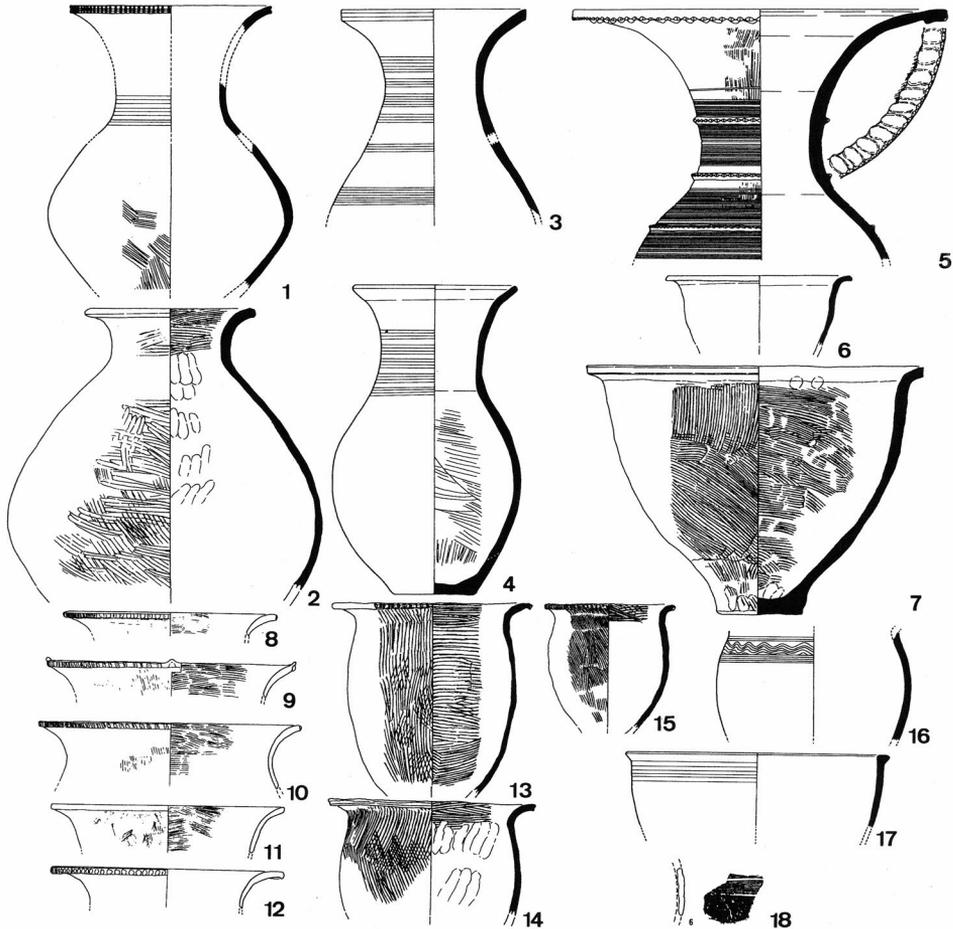
小論では近年の新資料の位置づけと、従来の編年のうち微調整が必要な部分に言及する。また、混乱を避ける意味で、編年の区分を中期1・中期2といった表記で編年を説明し、旧来のものとの併行関係を示すことにしたい。なお、小論で示した土器はすべて8分の1である。<sup>(注4)</sup>

2. 各小様式の特徴と基準資料

中期1 (第1図)

この小様式は、施紋や器形、器種構成、胎土の特徴など、前期的な要素の残存によって特徴づけられる。森岡編年では山城Ⅱ-1に、國下編年でもⅡ-1にほぼ対応するが、長岡京市神足遺跡R 10次、雲宮遺跡L 17次資料などの評価が異なる。乙訓地域では長岡京市南栗ヶ塚遺跡方形周溝墓3911、向日市鶏冠井遺跡S K 12451、<sup>(注5)</sup> <sup>(注6)</sup> 南山城地域では八幡市内里八丁遺跡S K 309 <sup>(注7)</sup> などに良好な資料がある。

山城においては、櫛描紋土器の成立を知ることができる資料が少ない。その器種構成は広口壺・広口長頸壺・鉢・甕があるが、その全体像は一括資料も少なく明らかではない。これらの資料にほぼ併行すると考えられる亀岡市太田遺跡では無頸壺も出土しており、<sup>(注8)</sup> 今後そうした形式の出土も予想される。



第1図 中期1

壺は胴の張る広口壺1・2と、胴部最大径に比して器高が高い広口長頸壺3～5がある。これらはそれぞれ前期のa形態・b形態からの系譜で理解することができる。この中で5の広口長頸壺は長くのびる口縁をもち、頸胴部に突帯を巡らせるものであるが、同一個体においてヘラ描沈線紋と櫛描紋が併用されるなど、前様式の様相を色濃く残している。

壺の口縁端部はナデによって丸くおさめる2・4が目立つが、ヘラによって加飾される1・3も少なくない。また、この小様式には体部加飾にヘラと櫛が併用される4・5・18がある。特に4では櫛の原体も未だ完成したものではなく、1条の幅が広く粗いヘラを束ねたような原体が用いられており、山城における櫛描紋成立期の状況をよく表わしている。

これらのうち、1はヘラ描沈線紋のみで飾られる壺である。この資料は、南栗ヶ塚方形周溝墓3911と同時に築造されたと考えられる同方形周溝墓3914からの出土で、櫛描紋で胴部を加飾する甕16と相伴していることから、この小様式にはヘラ描沈線紋が残存するものと考えられるが、この個体が単独で出土した場合、現時点では積極的にこれらを中期と呼ぶことは当地域では困難である。鉢は如意形口縁で小型の6と大型で器壁の厚い7が出土している。高杯については適当な資料が出土していない。

こうした壺や鉢の器形や口縁端部への加飾、施紋工具の選択などは、前期的要素の残存として整理できる。甕については遠賀川式土器以来の基本器形である如意形口縁のものが主流であるが、ハケ工具はそれまでのものと比べると極めて粗く、深い調整痕を残すいわゆる大和型甕とよばれるハケ甕が主流となる。この小様式に位置づけられる当地域のハケ甕は比較的薄く仕上げられ、胴が張らず、口縁が外方へ長くのびる倒鐘形のもの(13～15)が主体となる。口縁部の調整もこの小様式のものとは最終調整にナデが用いられず、口縁部の余った粘土がハケ調整によって巻き込み気味に整形される。こうしたハケ甕が当地域では主体をなし、16のような加飾する甕や、逆L字口縁となる17は少数派である。

この小様式では加飾工具や方法、器形などに前期要素を色濃く残すことを特徴として設定できるが、続く小様式と比べて存続期間は短期間であった可能性が高い。本小様式に比定したものうち、より稚拙な櫛描紋をもつ南栗ヶ塚方形周溝墓3911を古相に、鶏冠井SK12451を甕の胴部形態などから、より中期2に近い位置づけを与えることができよう。

なお、森岡編年ではこの小様式に神足遺跡R10次5号方形周溝墓が位置づけられているが、このハケを全面に残す壺(『様式と編年』102)に施された半截竹管紋は、当地域では前様式との関係ではなく、複合櫛描紋工具との関連でみることができる。『様式と編年』以降に発表された相伴資料や周辺の墓域資料からも、少なくとも中期4まで下げる必要がある。<sup>(注9)</sup> また、雲宮遺跡SD1702・1704・1713の資料<sup>(注10)</sup>については、前期の資料と混在するものの、口縁内面への加飾やコブ状突起といった要素はこの小様式には位置づけられない。

## 中期2 (第2図)

この小様式は前期的な要素の払拭によって特徴づけられる。典型的な旧来の第二様式に近い内容である。施紋については直線紋・波状紋に加え、扇形紋などのバリエーションが生まれる。乙訓では雲宮 S K 1719・S D 1707、向日市鶏冠井清水遺跡 L 400次方形周溝墓<sup>(注10)</sup>2、南山城では内里八丁 S H 108、京田辺市三山木遺跡 S D 9829 などに良好な資料がある。森岡編年では山城Ⅱ-2の古相に、國下編年ではⅡ-2の一部にあたるが、京都市烏丸綾小路(長刀鉾町)遺跡<sup>(注13)</sup> S K 1003、鶏冠井 S D 0301、神足 S K 1689 などについては次小様式以降へ下がるものと評価した。

器種構成は広口長頸壺・太頸壺・直口壺・鉢・甕がある。器形分化への動きはまだ鈍いが、器壁も薄く、胎土中の砂粒も細くなり、前期からの脱却がはかられる。櫛描紋の原体も安定したものとなるが、櫛描紋自体は未だ稚拙で、継ぎ描きも顕著に認められることから、回転台は使用されていないものと考えられる。

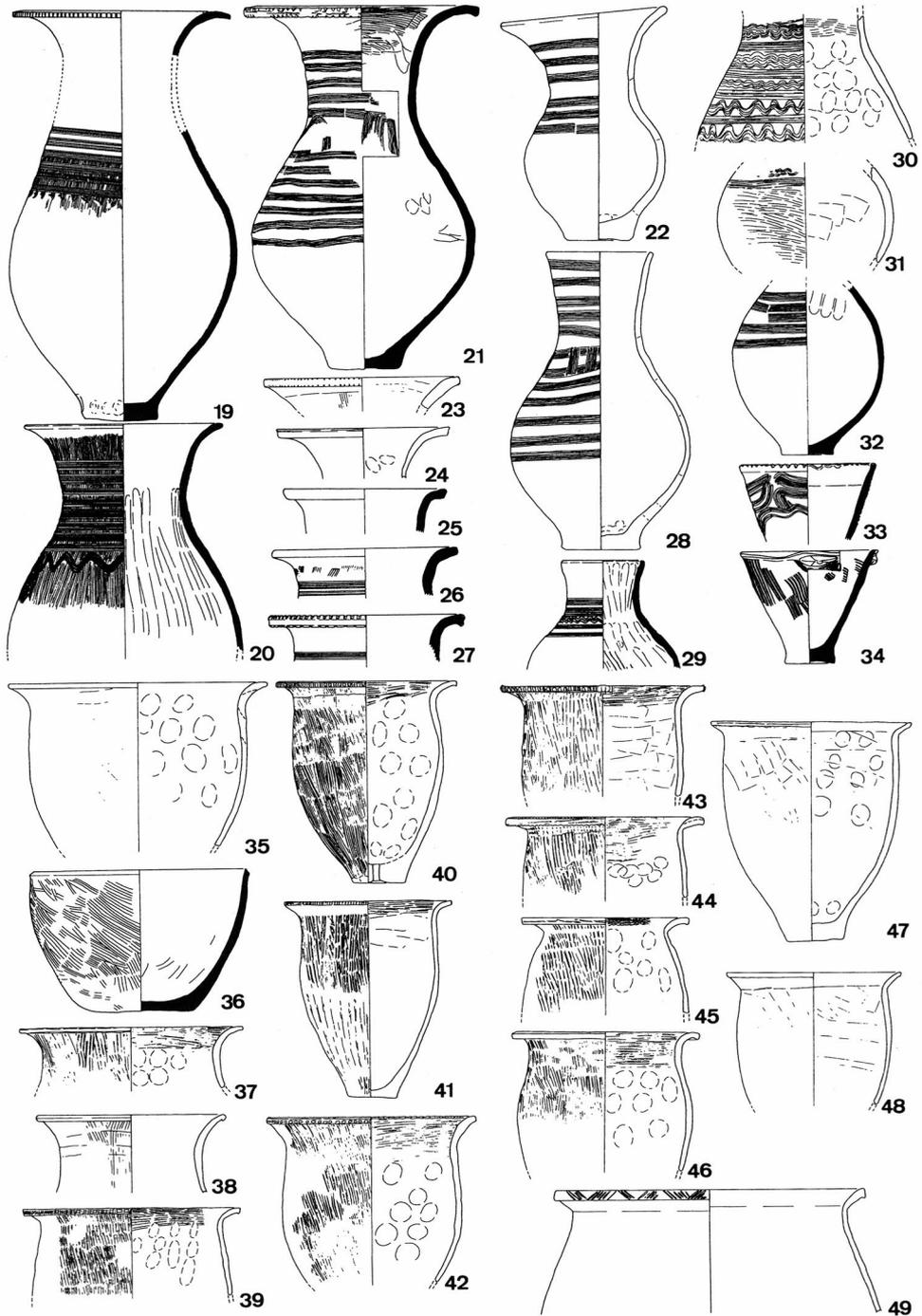
広口長頸壺は胴部にやや張りが増し、同時に頸部がのびる傾向にある。口縁端部への加飾は刻目へと収斂し、前期的なヘラを用いるものは姿を消す。ナデ技法によって壺の口縁端部は面を形成するようになり、これに起因して口縁端部の刻目は、正面に加えて上下端へとその選択肢が広がる。中期1から系譜を追うことができる19・20や、頸部に締まりがあり型式学的には後発となる21がある。ただし、この21も次小様式のものとは比べると頸部が太く、頸胴間の境が未だ明瞭ではない。

太頸壺は良好な完形品がないが、口縁部片は報告されており、一定量出土している(25～27)。広口長頸壺と比べて広い端面を形成するのが特徴である。

直口壺は口縁から頸部までが長い28と短い29がある。概して前者は中型品、後者は小型品である。直口壺の占める割合は全体の中では低い。

鉢は直口椀型の33・34、如意形口縁の35と椀形36などがある。最も多いのは如意形のもので、他は少数派である。34のようなコブ状突起は、この様式では鉢の口頸部直下にのみ認められる要素で、如意形口縁のものにもしばしば見られる。

甕は胴部最大径が口径を上まわらないものの、胴に張りが出る。こうした口径と胴部径の関係はこれまでも時間差を認識する指標とされてきたが、当地域ではこれ以外にも口縁端部の処理によっても、時間的な変化を見ることができる。中期1の段階には、口縁部調整にヨコナデが用いられないため、口縁端部にはハケ工具による粘土の巻き込みが認められた。この小様式では、ヨコナデが採用されることによって端部の巻き込みは認められなくなる。このうち、ヨコナデが強く、刻目を施さない45・46が森岡氏の言う「撰津形」にあたる。この小様式ではまだ刻目をもつ大和型が優勢であるが、当地域では次小様式には、



第2図 中期2

ヨコナデを採用する甕が主体となる。また、甕の口縁内面に波状紋が施紋されるようになるのはこの小様式からであるが、全体の中で占める割合はまだ多くはない。大型の甕49は、胴部径が口径を上回るもので、次小様式を強く志向するが、胴部最大径の位置が低いいためこの小様式に位置づけた。

山城における甕の特徴の一つに重厚な底部があげられる。これらの中には40のような穿孔を持つものがある。いずれも焼成前に行われるもので、石器等による回転運動によって穿孔されている。機能としては甑など、甕以外の用途も考えられるが、底部の穿孔以外には分類することができないのが現状である。穿孔を有する底部は中期2・3に最も多く見られ、以降の小様式へは続かない。

これらの資料のうち、雲宮S D 1707をより古相に、鶏冠井清水方形周溝墓2と三山木S D 9829をより新相に位置づけられる。旧編年と位置づけが異なる神足S K 1689<sup>(注15)</sup>については、壺62～64がすでに長頸化の傾向を強めており、71は大山崎町下植野南S T 180<sup>(注16)</sup>に共伴例があり、この段階まで古く置くことはできない。甕93も胴部の張りが発達し、口径を上回ることからも、次小様式への帰属が妥当であろう。

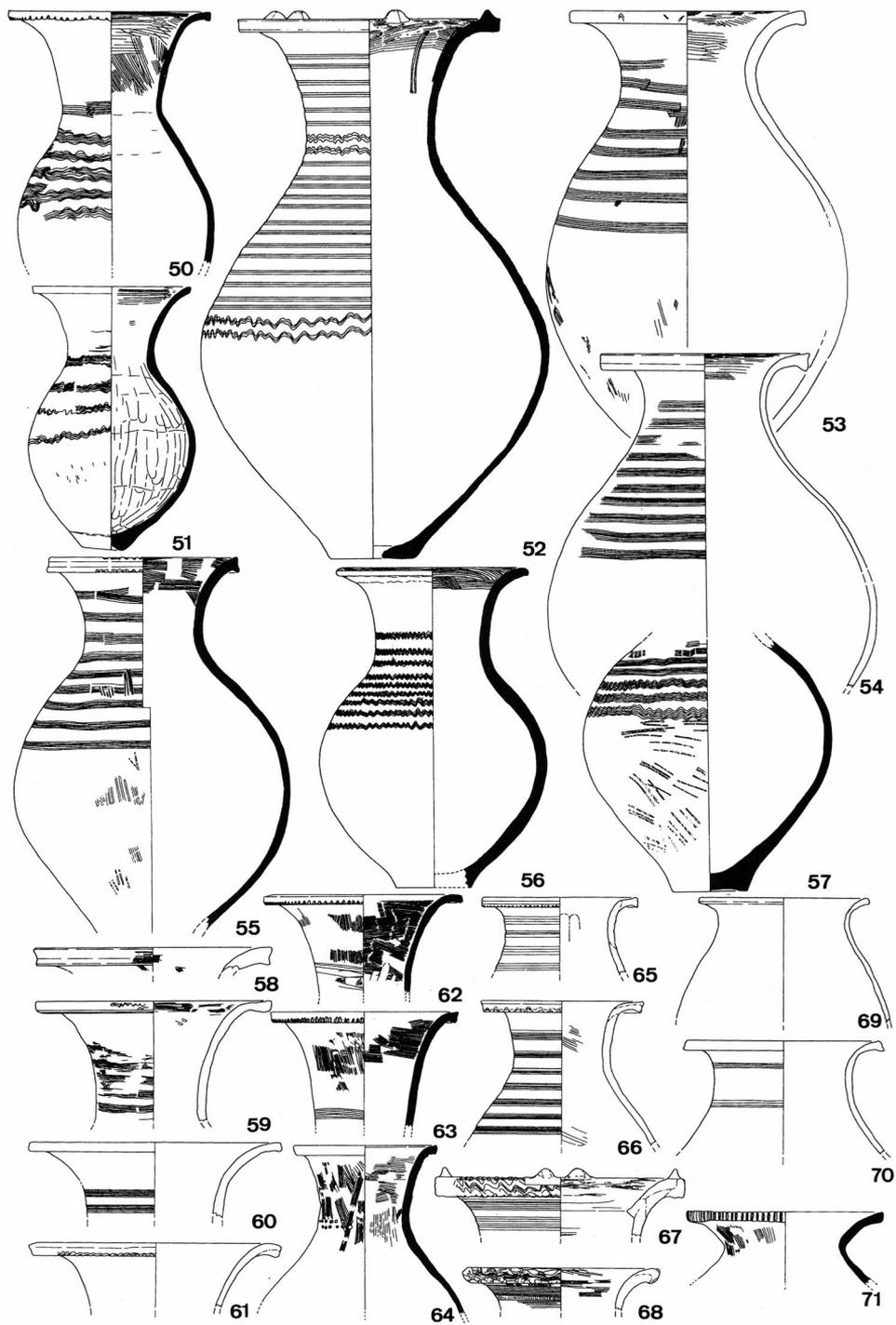
### 中期3(第3・4図)

この小様式は器種構成の複雑化と大型品の組成によって特徴づけられる。乙訓では神足S K 1689<sup>(注15)</sup>、同S D 16309<sup>(注17)</sup>、鶏冠井S H 12450<sup>(注6)</sup>、向日市森本遺跡S K 283115<sup>(注18)</sup>、鶏冠井清水方形周溝墓1などが良好な資料としてあげられる。森岡編年では山城Ⅱ-2の一部と山城Ⅱ-3の古相部分に、國下編年ではⅡ-2とⅡ-3の一部にほぼ併行するが、鶏冠井S D 0301<sup>(注14)</sup>、烏丸綾小路(長刀鉾町)S K 1003<sup>(注13)</sup>は下げて評価した。

壺は広口長頸壺・太頸壺・無頸壺・直口壺・細頸壺などがある。直口壺を除くすべての壺で、器高が50cmを越える大型品が目立つようになる。

広口長頸壺もバリエーションに富むようになる。どの長頸壺も前小様式と比べて頸部が締まるが、この小様式では未だ明瞭に頸胴部間の境は強調されていない。広口壺はヨコナデによる口縁端面の形成をさらに強く志向するため、刻目は正面から施せなくなり、両端へと移動する。中でも下端への刻目が増える傾向にある。また、本小様式には端面を櫛描紋で加飾する53・59・65なども認められるが、刻目だけのものに比べるとまだ少ない。

大型の広口長頸壺52は前小様式と比べると、口頸部が一転して短くなる傾向にある。壺の口縁部は全体的にやや肥厚するようになり、口縁端面も拡張の傾向が顕著となる。ただし、口縁に粘土帯を貼り足して大きく垂下させるもの(『様式と編年』203～205)は確実な共伴例がなく、この小様式にはまだ存在していないものと考えた。中型品50・51・62・63は

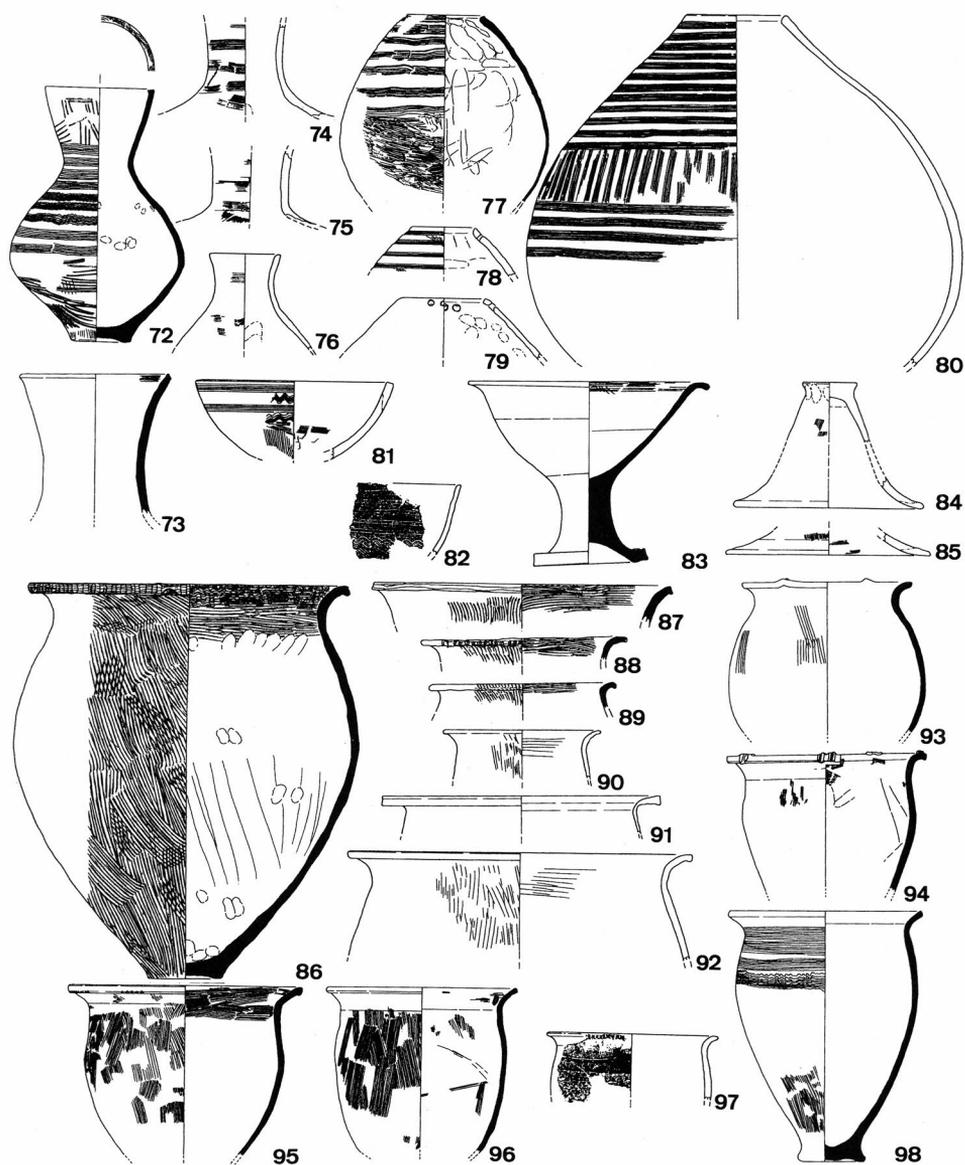


第3図 中期3(1)

ラッパ状に広がるが、口縁端部は直線的に広がり、垂下しない。

太頸壺はこの小様式でバリエーションが増加し、次小様式に続く69～71が出現する。太頸壺や広口長頸壺の一部にはコブ状突起をもつ52・67が現れるが、出現期のものは口縁内面に付き、比較的コブのサイズも大きいのが特徴である。

直口壺72は相変わらず少数派である。この小様式ではさらに頸がしまり、胴が強く張る傾向がある。細頸壺74～76の確実な出土例は本小様式からである。全体を知ることができ



第4図 中期3(2)

る完形品の出土はない。無頸壺 77～80 も、出土量の総量が増加することから、バリエーションを認識することができるが、本小様式新出というわけではないだろう。

壺の胴部施紋は、直線紋が主体ではあるが、この小様式から波状紋が主体となる個体も散見される。また、この小様式から複合櫛描紋が当地域でも散見されるようになるが、盛行するのは次小様式以降である。

鉢は碗形のものがある。如意形もなくなるわけではないが、好資料がない。

高杯はこの小様式でも確実な共伴例を欠くが、内面突帯がなく脚柱部が中実で、脚裾が未発達な 83 が、下植野南 S T 180 <sup>(注16)</sup>などに先行するものと位置づけられよう。

甕は大和型と摂津型が相半ばする。胴部の張りがさらに強まり、口径を上まわるようになる。この時胴部の張りが強くなるのに反比例するように、口縁の長さが短く、強く屈曲するのが特徴としてあげられる。口縁内面への波状紋施紋はこの小様式において出現頻度が高くなる。94～96の甕は他に類例をみないが、93のような胴部の張る甕との共伴関係からこの小様式に位置づけた。また、加飾される甕 97・98 も少数派ではあるが出土している。

この小様式は垂下口縁壺や、コブ状突起を多用する壺、口縁内面への加飾壺など、森岡・國下両氏が第Ⅱ様式へととりこんだ、畿内第Ⅲ様式への過渡期的部分を再び切り離れたことにより、森岡編年の山城Ⅱ-3 と明確には対応しない。また、旧編年では烏丸綾小路(長刀鉾町) S K 1003 が、この小様式に併行する段階に位置づけられている。この遺構は同 S K 1001 との重複関係から古く位置づけられる傾向にあるが、最上層と報告される 178・186 はⅢ様式の遺物であり、切り合い関係を信じることはできない。また、187の甕胴部の施紋は摂津にみられるような櫛描ではなく、ハケ原体を用いており、むしろ近江などとの関係から中期 4 以降への位置づけが妥当であろう。

#### 中期 4

この小様式は新器種の組成と法量の多様化によるセット関係の一新を特徴とする。乙訓では神足方形周溝墓群 <sup>(注9)</sup>、下植野南 S D 39503 <sup>(注19)</sup>、同 S T 180 <sup>(注16)</sup>、京都市中久世遺跡 S K 20 <sup>(注20)</sup>、大崎町脇山遺跡 S K 02 <sup>(注21)</sup>、京都盆地では烏丸綾小路(長刀鉾町) S K 1003・S K 1001 <sup>(注13)</sup>、南山城では精華町畑ノ前遺跡 <sup>(注22)</sup>、内里八丁などに良好な資料が存在する。

この小様式は、山城では爆発的な集落の増加をみる時期であり、かつ器種構成にも大きな変化が認められる。当地域では、中期 3 と 4 の間により大きな画期がある。現在下植野南 <sup>(注23)</sup>、京都市東土川遺跡 <sup>(注24)</sup>、久御山町市田齊当坊遺跡など、この小様式に属する資料が整理中である。

### 3. おわりに

小論では、新資料の位置づけを中心として山城地域の編年観の整理を試みた。先学の編年を土台に新資料で補強する形となった。

呼称の混乱を避けるために中期1といった表記をとったが、大きく整理すると、従来の畿内第Ⅱ様式に対応するのが中期1～3である。ただし、中期1の存続期間が短いと考えられることから、実質的には畿内第Ⅱ様式を中期1・2と中期3の2小様式に細分する結果となった。

また、森岡編年や國下編年の第Ⅱ様式と比べ、その幅がせばまった、つまりは従来の畿内第Ⅱ様式に戻ったというところがある。森岡氏による「山城の第Ⅲ様式の成立が、従来の第三様式の認定ほど単純な動きではない」との指摘もあるが、中期3と中期4の間に認められる器種分化の傾向と当地域における遺跡数の爆発的な増加などから、当地域ではやはりこの小様式間に大きな画期を認めうると考えた。中期後半の編年については、以後資料が出揃うのを待って再論したい。

小論をまとめるにあたり、次の諸学兄から資料調査の便宜や数々の有益な御教示をいただきました。記して深謝申し上げますとともに、私の不勉強のためにその意を十分にくみ取れなかったことをお詫びします。

京都文化博物館、(財)古代学協会、京都市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センター、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、京田辺市教育委員会、精華町教育委員会、京都府立山城郷土資料館。

秋山浩三、伊藤淳史、伊庭 功、岩崎 誠、植山 茂、岡崎晋明、小田桐淳、桐山秀穂、國下多美樹、国分政子、高橋美久二、鷹野一太郎、鳥居幸一、中島皆夫、深澤芳樹、豆谷和之、村川俊明、森岡秀人、各遺跡の調査担当の方々、京都の弥生遺跡を考える会の諸学兄(敬称略、順不同)。

(ふじい・ひとし=当センター調査第2課調査第4係調査員)

図版で掲載した土器の出土遺構は以下の通り。

中期1 南栗ヶ塚方形周溝墓3911(1・3・4・5)、同方形周溝墓3914(16・17)、内里八丁S K 309(8～12・18)、鶏冠井S K 12451(2・6・7・13～15)

中期2 雲宮S D 1707(19・20)、同S K 1719(25～27・29・33・34)、内里八丁S H 108(30・35・39・40・43・46)、同包含層(41)、鶏冠井清水L 400次方形周溝墓2(21・36)、三山木S D 9829(22・24・28・38・49)

中期3 森本S K 283115(53・54・58～61・69・70・74～76・79・80・90～92)、鶏冠井S H 12450(86)

～89)、同S D 24872 第4 a層(65～68・78・81・82・84・85・97)、神足S K 1689(62～64・71・73・93～96・98)、同S D 16309(50・51)、同R 26(56)、同R 65次(83)、鶏冠井清水L 400次方形周溝墓1(55・57・72・77)、岡崎(52)

- 注1 森岡秀人1990「山城地域」(『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅱ』 木耳社)
- 注2 佐原 真1967「山城における弥生式文化の成立—畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—」(『史林』第50巻5号)
- 注3 國下多美樹1994「鶏冠井遺跡銅鐸鑄型の評価をめぐって(上)(下)」(『古代文化』46巻7・8号(財)古代學協會)
- 注4 國下多美樹1993「山城地域における中期弥生土器編年—搬入土器と地域色を中心に—」(『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』)
- 注5 白川成明・原 秀樹1983「長岡京跡右京第39次(7ANQMK地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第11冊 長岡京市教育委員会)
- 注6 黒坪一樹・平野仁佳子・村尾政人1986「長岡京跡左京第124次発掘調査概要(7ANENR地区)」(『京都府遺跡調査概報』第19冊 (財)京都府埋蔵文化財調査権休戦ター)
- 注7 山下秀樹・定森秀夫・千喜良淳1998『内里八丁遺跡 第二京阪道路建設に伴う京都府八幡市所在遺跡の調査』(『京都文化博物館調査研究報告』第13集 京都文化博物館)
- 注8 水谷寿克・村尾政人・田代 弘1996『京都府遺跡調査報告書』第6冊((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 注9 山本輝雄・久保哲正1980「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要長岡京右京第10・28次調査」(『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会)  
福永伸哉1991『長岡京市史』(長岡京市役所)
- 注10 岩崎 誠1980「(仮)古市保育所建設に伴う発掘調査概要 長岡京左京第17次(7ANMTT地区)」(『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会)
- 注11 石井清司1998「長岡京跡左京第400次(7ANEMR-4地区)・鶏冠井清水遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第80冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 注12 鷹野一太郎・鳥居幸一1999「三山木遺跡」(『二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報—三山木地区特定土地区画整理事業地内の調査—』(『京田辺市埋蔵文化財調査報告』第28集) 京田辺市教育委員会)
- 注13 若松良一1984『平安京左京四条三坊十三町—長刀鉾町遺跡—』(『平安京跡研究調査報告書』第11輯 (財)古代學協會)
- 注14 山中 章・國下多美樹・浜崎悟司・亀割 均1984「長岡京跡左京第100次(7ANEHD地区)～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第4次～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集 向日市教育委員会)
- 注15 岩崎 誠1989「神足遺跡第16次調査」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第4集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)

- 注16 石井清司・竹下士郎・中村周平・藤井 整1999「名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成10年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 注17 岩崎 誠1986「長岡京跡右京第163次(7ANMKI地区)調査概要右京六条一坊四町・勝龍寺城跡・神足遺跡・神足古墳」(『長岡京市文化財調査報告書』第17冊 長岡京市教育委員会)
- 注18 山中 章1995「長岡宮跡第283次(7ANBHG地区)～朝堂院北東官衙、森本遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書第39集』 (財)向日市埋蔵文化財センター)
- 注19 中川和哉・岩松 保・岡本一秀・尾関真二・黒坪一樹・竹井治雄・戸原和人・鍋田 勇1999『下植野南遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 注20 京都市教育委員会1999『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度(京都文化観光局)
- 注21 野々口陽子1997「長岡京跡右京第541次・脇山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 注22 定森秀夫・千喜良淳1987『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書－煤谷川窯址・畑ノ前遺跡－』((財)古代学協会)
- 注23 野島 永・堀 大輔1998「名神高速道路関係遺跡平成9年度発掘調査概要－長岡京跡左京第399次(7ANVKN-11・7ANVST-7)－」(『京都府遺跡調査概報』第84冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 注24 岩松 保・森島康雄・竹原一彦・柴 暁彦・野々口陽子1999「国道1号京都南道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)